

みなとびあとの出会いと期待

私とみなとびあとの出会いは、建設が決定して間もない、平成十一年のことだったと記憶しています。博物館の建設に先立って、敷地内にある石庫とプレハブに収蔵してあった民俗資料の整理を、「学芸員の資格取得を希望する学生の実習としてやりませんか」という、新潟市歴史文化課の民俗担当学芸員からの声かけがきっかけでした。それから三年間にわたり、夏休みの四日間、三十名前後の学生とともに資料の整理作業を手伝わせてもらいました。

収蔵資料のほとんどは旧市内から集められたもので、建物の中に所狭しとおかれていました。これらの資料は、直接人びとの生活に関わってきた実物資料で、いずれも人びとの生活の歴史を知ることでできる貴重なものばかりでした。人ごとながら、これらを今後どのように活用するのか、いささか心配になりました。

ご存知のように博物館には、資料の収集・整理・保管・調査・研究、教育・普及という四つの大きな機能があり、これにもとづいて博物館では様々な活動が展開されています。

これらの機能を有機的に関連させながら、地域の博物館では市民をその活動にいかについ込み、親しまれる博物館に仕立て上げていくのが重要な課題であると思います。

「親しまれる博物館」とはいうもの

の、市民に認知され、賑わいのある博物館施設とするためには博物館側からの様々な取組が必要になってきます。

みなとびあでの取組の一部は、『帆船成林』(博物館ニュース)やホームページなどで紹介されていますが、地域を活動の主体においたものも多く、地域に目を向けた学芸員の企画力に驚くこともしばしばです。とくに、みなとびあが地域に目を向けた博物館だと強く感じるのには、「活動展示」です。折々に開催される企画展は相応の予算が付くようですが、予算のない中で組み立てられるという「活動展示」の工夫にこそ、博物館の実力が垣間見えると思います。

四回目の今年は、「収集活動」をテーマにしました。収集活動は博物館の大きな仕事です。収集された資料を、整理・分類したうえで紹介しようとする試みは、かつて整理作業を手伝ったときに感じた収蔵品の活用への心配を一掃しました。これは私の感じたほんの一例ですが、市民に目を向けた地域博物館としてのみなとびあへの期待は高まるばかりです。来館者に感動をあたえる、みなとびあの活動を持続されるよう期待しています。

(池田 哲夫 新潟大学教授)

たいけんの場としてのみなとびあ

運営協議会に参加した理由

三年前、地域教育コーディネーターをしていた際に、昔ながらのやり方で味噌を作る機会があったんです。そのときに、子どもたちには様々な体験活動を通して、色々なものに興味を持ってもらいたいと考えました。企画する側の負担は大きいですが、それでも子どもたちの体験活動の場は絶対あった方がよいと思ったんです。また、個人で行うにも場の確保等に限界があります。そこで、子どもたちに体験活動をさせてあげることができるとみなとびあのような場所を大事に守っていききたいと思い、応募しました。

みなとびあの「たいけん」

一言で「体験活動を継続する」と言っても大変だと思えます。他所と連携して大きな事業を行い来館者を集めるのも大切ですが、特色あるワークショップや子どもたち向けの事業もおこなってほしい。そのバランスを取るのとても難しいですし、体験活動の継続はとても地道ですが、是非続けてほしいです。

みなとびあでは、「塩作り」や「わらじ作り」のような大人も楽しめる体験活動もありますよね。私の周りには結構体験が好きな人が多いので、そういう大人向けの体験は絶対喜ぶと思うんです。実際もう少し大人向けワークショップがあれば、子どもだけでなく

大人も楽しめると思います。

また、そういう昔ながらのやり方を体験することで、道具や生活の変化も感じられると思います。おじいちゃん、おばあちゃんがいる人は昔のことを聞けるけど、そうじゃない人が昔のことを知ることは中々難しいですね。そういう人たちが体験活動を通して、昔のことについて知ることが出来る場所であってほしいです。

体験活動の広報

私達のような子育て世代だと、ホームページを見に行くよりも、流れてくる情報を流し見する中でチェックをすることが多いですね。なので、例えばフェイスブックなどのSNSを使ったり広報をしてくれるといいと思います。チラシやポスターにしても、学校やスーパーなど、普段の生活でよく行く場所があると嬉しいですね。それから地域の子育て情報誌に載せれば、子どもと一緒に体験活動に参加する方も増えるのではないのでしょうか。折角の体験活動なので、沢山の方に知ってほしいと思います。

これからのみなとびあ

みなとびあには「ここへ行けば体験活動ができるよ」と言える場所であってほしいです。そしてその活動が、子どもたちがこれから生きていく上での糧になればと思います。

新潟市歴史博物館 運営協議会公募委員 星名 泉さん

新潟の町・グッドなアクション

平成十四(二〇〇二)年子ども達に新潟の町の歴史に興味を持ち、触れる機会になればと、自家製の案内板を日和山や小路に貼り、地図を作り、案内を始めました。

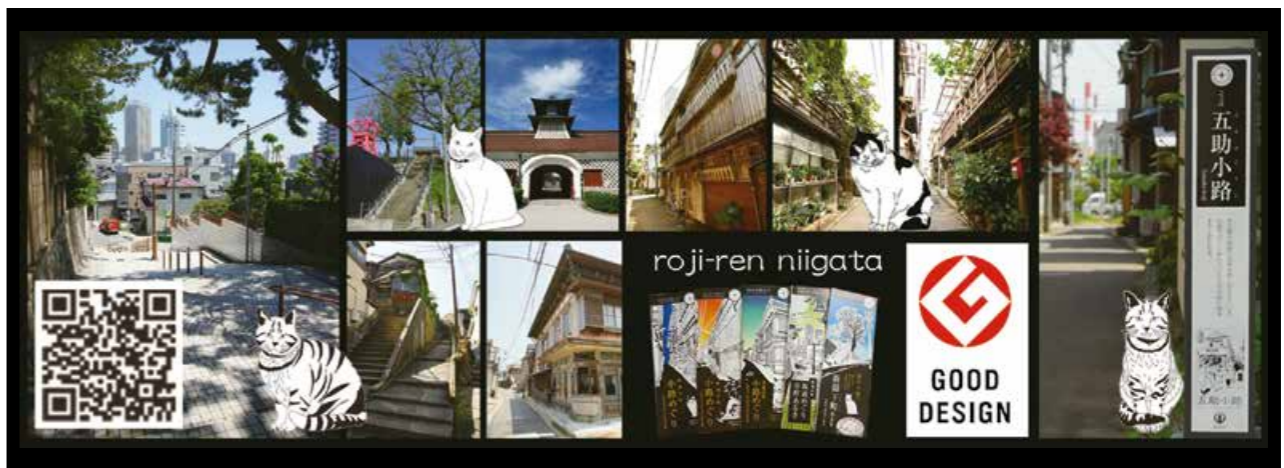
平成十九(二〇〇七)年それらを取りまくる形で、みなとびあ&新潟市歴史文化課の皆さんの協力を得、新潟市と路地連新潟の共同の取り組みとして「新潟の町・小路めぐり」が始まりました。

平成二十(二〇〇八)年より、新潟の町の歴史や風景を、楽しみながら案内する「新潟ステイガイド」さんや、小中学校の総合学習での案内板や地図の活用も始まり、みなとびあから日和山までの、まちあるきルートも、すっかり定番コースとなりました。小路イラストの入ったエコバックや、まつりの灯籠も登場し、自分の町の歴史や風景を、楽しみ、発信するアクションが加速しています。

平成二十五(二〇一三)年には、そんな新潟の活動に対して公益財団法人日本デザイン振興会より、グッドデザイン賞が与えられました。

新潟の歴史を知り、楽しみ、発信する。これからも、みなとびあさん、お世話になります。

(野内 隆裕 路地連新潟)



市民の活動の場としてのみなとびあ

ボランティアに参加したきっかけ

(静子さん、以下静) 柳都大橋ができたとき、橋の誕生祭に参加したんですね。そこで柳都大橋から景色を眺めるときに、税関を中心としたその周辺をもっとよく知りたいとの興味が湧きました。そんな時に「みなとびあ」ボランティアの募集記事を見つけて、新潟を知る良いチャンスだと思い、主人と一緒に応募しました。

(豊雄さん、以下豊) 一緒に共通のボランティアもしてみたいと考えていた時、たまたま「みなとびあ」で募集していた。ボランティアの内容を見て、よし、これでいいこうということになった。早いもので今年で一〇年目を迎えるようになっています。

実際にボランティアをしてみても

(豊) 大勢の人達と接しながら学ぶことが大変楽しい。ここでは学ぶための条件が揃っています。そこが最大の魅力です。ボランティアに関係する資料・書籍が家の本棚の一角を占めるまでになった。宝ものです。一つには、どのような来館者にも楽しみな鑑賞し、よく分かってもらい、気持ち良く帰って頂く、ひとりひとりが「得るもの」を持ち帰って頂けるようなボランティアの在り方、接し方はどうあつたらよいかをいつも考えています。た

ゆまない勉強が必要ということでしょうか。

(静) 普通ボランティアと言うと少し手助けをする感じでしょう。でもここは、自分たちでも勉強して、直接来客の皆さんにお話できますよね。そこが他のところとは違う。いくら勉強しても終わらない。そういうことをさせて頂ける場所です、すごくありがたかったなって思います。

(豊) 「みなとびあ」で県内外の人達といろんな交流ができることはとても楽しい。来館者には「一期一会」の気持ちで寄り添いながら接したいものです。

これからどうしていきたいか

(豊) 年が年なので、体調を見ながら無理をせず、手の届く範囲でやる場所までやってみたいと思っています。そのように取り組める場ですし、ありがたいことです。

(静) 身体の調子を考えながら、出来る範囲で長く活動していきたいです。気持ち任せになつた時に「こうしていられないんだ」って気を引き起こしてくれる場所ですし、ここへ来て皆さんと触れ合うことで、私は元気をもらっている。そういう勇気を湧き起こしてくれる場所だと感じますね。

みなとびあボランティアスタッフ 小林豊雄さん・静子さん

